

43163
教科書文庫

5
8/0
34-1948
01304
49572

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

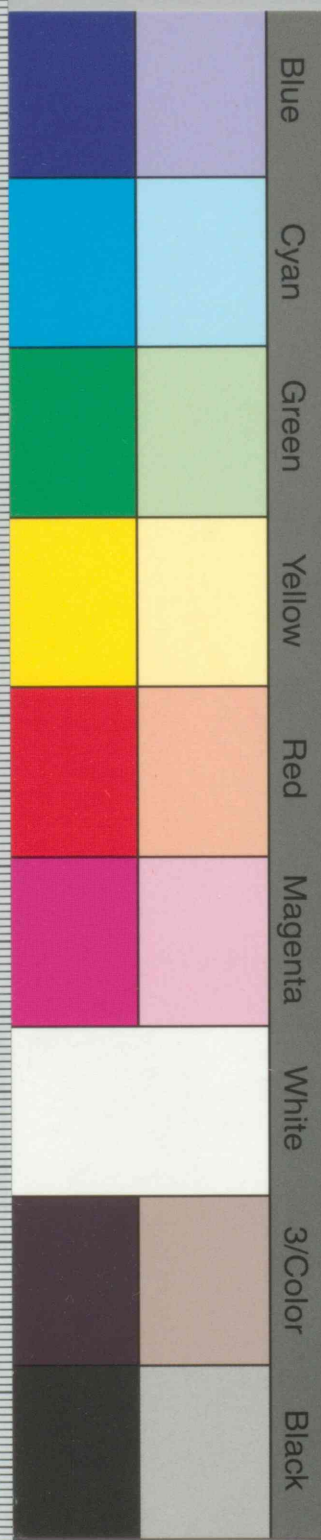
C
Y
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

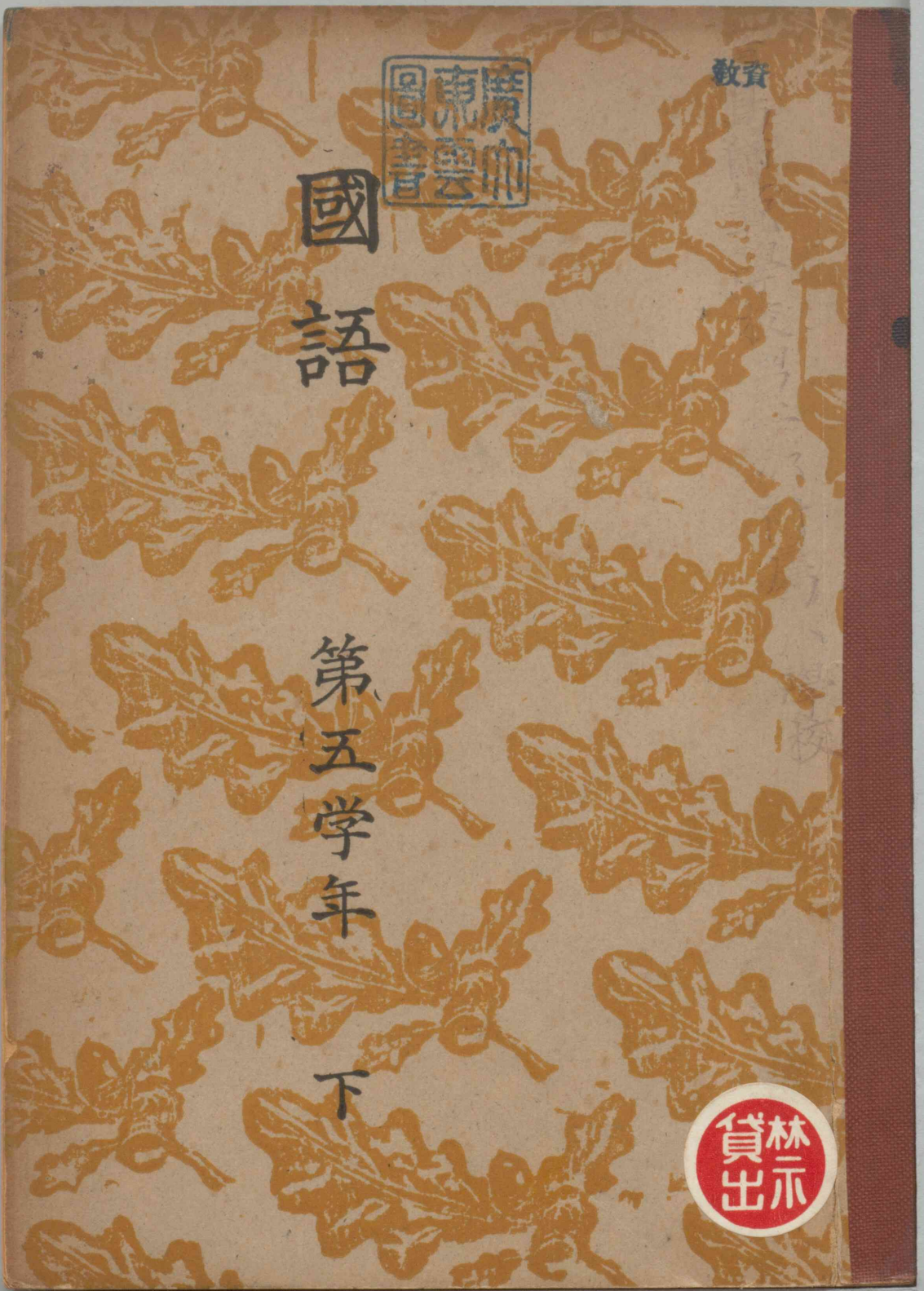
Inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20



教資

廣
東
東
莞
圖
書
館

國語

第五学年

下

貸出

教資

國

語

第五学年

下



中央図書館

広島大学図書

0130449572





十一	ある写真帳……………	九十六
十	ことばのはたらき……………	八十七
九	テニス……………	七十七
八	雪まろげ……………	七十
七	みえない力……………	六十四
六	傳説……………	五十五
五	人形しばい……………	四十三



	もくろく	
一	小さな行……………	四
二	写生……………	十三
三	わたしの民ちゃん……………	二十三
四	光を求めて……………	三十一



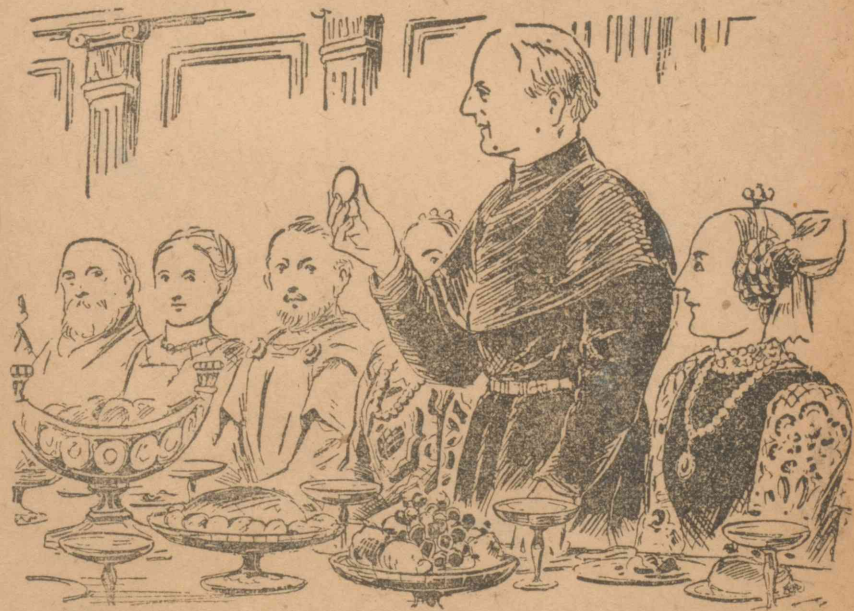
一 小さな行

コロンプスのたまご

コロンプスがアメリカを発見して帰ったとき、イスパニア人はたいへん喜びました。

ある日、祝賀会の席で、人々がかわるがわる立ってコロンプスの成功を祝しますと、ひとりの男が、

「大洋を西へ西へと航海して陸



地にであつたのが、それほどの手がらだらうか。

といてあざわらいました。

これをきいたコロンプスは、つと立って、テーブルの上のゆでたまごをとり、

「みなさん、こころみにこのたまごをテーブルの上に立ててごらんなさい。」

といました。

人々は、なんのためにこんなことをいいたしたのかと思ひながらやってみましたが、もとより立とうはずがありません。このときコロンプスは、コツンとたまごのはしをテーブルにうちつけて、なんの苦もなく立てていきました。

「みなさん、これも人のしたあとでは、なんのぞうさもないこ

とてございましょう。

やまぶきの一枝

ある日、太田道灌は、たかが
りにでかけました。すると、
わか雨が降りだしたので、近く
の家をたずねて雨具をかりるこ
とにしました。

「もしもし。」

こういって戸をたたきますと、
おくからひとり少女がでてき
ましたので、



「雨で困っております。雨具をかりたいのですが。」

とたのみました。少女はなにを思ったのか、ふと庭さきにさい
ていた黄色なやまぶきの一枝をおつてきて、それをしずかにさ
しだしました。

道灌は、その花の枝を手にはしましたが、なんのことだかそ
の意味がわかりません。少女とやまぶきの花とをみくらべるば
かりでした。

それからのちになって、道灌は少女の心がわかりました。

それは、

「七重八重花はさけどもやまぶきのみひとつだになきぞ悲し
き」

という古歌に、少女の思いをたくしたものでありました。

はた織り

孟子がまだ子どものころでした。

家をはなれて勉強にてかかっていたが、ある日のこと、母親がなつかしくなり、会いたくなかったので、学校から家へもどってきました。

「おかあさん。」

といって、母のそばへかけよりました。そのとき、母ははたを織っていました。孟子の顔をみると、つと立って、そばにあつた小がたなをとりあげました。

孟子がびっくりしていると、母は、いままでたんねんに織り続けていたぬのを、小がたなでたち切ってしまった。



孟子はおどろいて、

「おかあさん、どうなさったのですか。」

とたずねますと、母は、

「おまえが学問のちゅうとで家に帰ってくるのは、ちゅうと、織物をちゅうとでたち切るのと同じことです。」
といました。

ガラスのかけら

ある町角の廣場で、ひとりのみすばらしい身なりをした老人

が、道路をうろうるとみまわしながら、なにかさがしては、それをひろってポケットに入れていました。

そのようすをみていたじゅんさが、老人のそばによつてきて、

「なにをひろっているのですか。」

とたずねました。

すると、老人は、ほおえみながらポケットに手をいれましたが、とりだしてみせたものは、ガラスのかけらばかりでした。

じゅんさは、

「こんなものをひろって、どうするのですか。」

か。

とききました。すると、老人は廣場の方を指さして、

「あの廣場で遊んでいる子どもたちをごらん下さい。くつをはいている子どもはひとりもいません。もしけがでもしてはかわいそうですからね。」

と答えました。

この老人は、ベスタロッチという人でした。

書物

リビングストーンが南アフリカを探けんしていたときの話です。ある日、リビングストーンが木かげで書物を読んでいました。それをみた土人のひとりが、書物というものはなにかすばらし



い力をもっているものだと考えました。
 そこで、リビングストーンがちよつとそとにでかけたるすにやっ
 てきて、その書物を手にとりました。
 そうして、ページをはぎとつて、たべてしまったということ
 です。



二 写生

(一)

文雄は、庭のかたすみに三きやくをすえ、
 がかを立てて写生
 をはじめた。

そこには一本のざくろの木
 があって、夏じゅう美しい花
 をつけていたが、あらかたちっ
 て、あとにいくつかの実がなっ
 ていた。それが、めきめきと
 大きくなり、このごろは、き



わだつて美しいつやつやしたしゅの色がさしてきた。文雄は、
それがかきたかった。

高いところからたれさがったのもいい。まだ青々とした木の
葉の中から大きいのをぞいているのもいい。だが、根もとのとこ
ろに三つ四つかたまってしだれているところもいい。

文雄は、あれこれと考えていたが、根もとをかこうと決心し
た。そうして、いよいよ下がきをかきはじめた。しかし、その
根もとの地面には、夏のころ、草とりをしてつみ重ねておいた
かれ草が、すっかりくちていた。文雄はそれが氣になってしか
たがなかった。

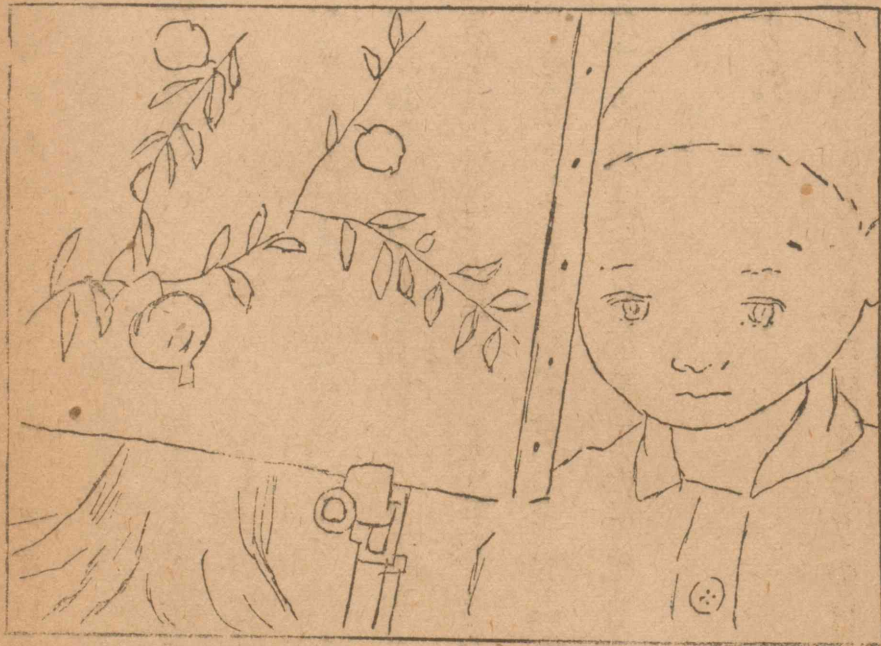
「これをとりかたづけてやろうか。」

ひとりごとをいいながら文雄が、そのくちた草をとりのけよ

うとすると 大きなえんまこ
おろぎが一びき頭をだしてい
た。そうして、文雄が手のの
ばすと、すばやくあなの中へ
かくれてしまった。

「これは、こおろぎの巣なん
だな。そのままにしておい
てやろう。」

文雄は、それをとりのける
のをやめて、また下がきにか
かった。だいたいの形をしっ
かりとつかんで、日のあたる



ところ、かげになったところ、力のこもった角、まるみのある面、重みのかかった枝のつけね、ふわふわした軽い葉、そんなところをはっきりつかまえたいものだと思って、しきりに木炭を動かしていた。

下がきがすむと、パレットの上にチューブから絵のぐをだして、色をぬりはじめた。これは、絵のすきだったおじさんからゆずってもらったもので、子どもにはりっぱすぎるほどだった。いい色の絵のぐがたくさんあった。しかし、パレットの上でみたときは、ずいぶん美しくみえるが、カンバスの上にぬりつけてみると、思いもよらない色になってしまふ。

かきなおし、ぬりなおしして、かいていくうちに、ひととおりできあがった。文雄は立ちあがってすこしはなれたところか

らじつとみつめた。

「だめだ。すこしも立体感がない。あのざくろの色もかけてないや。」

文雄は、三きやくにこしかけて、またふでをとってかきはじめた。

(二)

「もしもし。ざくろさん、ざくろさん。たいへんいい色になりましたね。」

「ああ、こおろぎさんですか。まだだめです。もっともつと美しくなりたいと思っていますのですが——あなたの声もたいそうよくおなりではありませんか。はじめ短い羽を動かしてピ

ツビツと鳴いていたときには、ほんとうにおかしいようでしたけれど——

「ぼくにはだれも教えてくれるものはありません。せんだって、ふと羽を動かしてみたら、ビツビツという音がしました。ははあ、これが鳴るんだなと思ってやっているうちに、だんだんおもしろくなったのです。おとなりの草むらでも、遠くの草むらでも、ビツビツという音がする。みんな自分たちのなかまだなと思ってよくきいてみると、じょうずなのもあるし、へたなのもある。毎晩鳴いているうちに、



すこしずつじょうずになっていくようです。

「近ごろはたいへんじょうずになりました。このあいだの晩もピアノの先生が、散歩にいらっして、あなたの鳴く声に耳をかたむけて、たいへん感心していましたよ。」

「いや、わたしはあんまりへたなので、耳ざわりでいやがっしておいでだろうと思いました——あなただってその実をそんなに美しくなさるには、ご苦心があたりだったでしょうね。」

「そこへいくと、こおろぎさんよりよほどいいのです。わたしはなん年もなん年も生きていますからね。一年一年とすんだことをかえりみて、來年はもつともつとよくしたいと考えることができます。」

ですから、はじめて実をつけた二三年は、青い小さな実が、

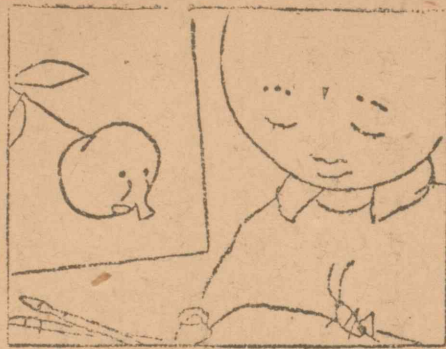
ほんの二つ三つ、ついたりつかなくたりだったのに、このごろでは、いつも美しい実をならせることができるようになりました。」

「やっぱり容易じゃないのですね。」

「この実のかけは黄色くぼけています。わたしはこんなところがすこしもないようにしたいのです。けれども、思うようにいきません。」

「ほら、そこで絵をかいている文雄さんがいつてましたよ。どうしてこのざくろはこんなに美しいんだらうって。」

「そうですね。わたしはまた、あのような絵のぐがあればいいなど思いましたよ。あれがあれば、どんなかけのところでも、美しい色にできますがねえ。」



「絵をかくことも、いっしょうけんめいに行いこしなくちゃだめでしょうね。」

「そうですね。文雄さんがりっぱな絵かきになるころは、わたしも、ずっと大きな木になって、美しいりっぱな実をたくさんつけるようになりたいものです。」

「ざくろさんが、来年とか、さ来年とか、それからもつとさきのことをおっしゃったりすると、なんとなくさびしくなります。」

「ごめんなさい、こちろぎさん。でも、あなたの歌には、そのさびしい氣持がでてるので、人の心を動かすのだから、あのピアノの先生がおっしゃいましたよ。」

「自分には父もある、母もある。まだわかい。先生もあるし、友だちもある。どんな絵の大家だって、一心にけいこをして、じょうずになったのだろう。そうだ、けいこだ。高い理想をめざして、いつしゅうけんめいけいこをすることだ。」
文雄はこう考えた。



三 わたしの民ちゃん

長いこと外地にいた姉たちがひきあげてきました。せまい家なので、兄は氣のどくだといって、いつもえんりよがちにしています。母をはじめ、うちの人たちは大喜びです。ひさしぶり、姉やふたりのまごたちといっしょに、同じ屋根の下でくらするのですから、家内じゅうが歓声をあげているといつても、いいすぎではありません。

やしきがすこし廣いし、父がまえからそういうときのことを考えて、近所の荒れ地を三十アールばかりかいこんして、さつまいもや野菜を作ったりしていたので、さしあたり困ることは

ありません。

ふたりのまごというのには、父母にとってのことですが、わたしには、かわいいめいとおいにあたります。

おいの正男^{まき}ちゃんは、五つですから、もうひとり遊びができますが、めいの民ちゃんは、二つ、満ていえば一年三ヶ月で、まだ歩けません。発育がたいへんおくられていて、かわいそうです。わたしは民ちゃんをひと目みたとき、天にもものぼるほどうれしかったのです。

民ちゃんをなんとかして早く歩くようにしてやりたいものです。民ちゃんは、まだ、うんこもしっこもいえません。早く、いえるようにしてやりたいものです。民ちゃんは、ぼつぼつものをいいかけていますが、ちよつときいてもわかりません。姉

だけ、にわかるへんなことばをいっています。わたしも早くそれを覚えたいと思います。

学校から帰つてくると、わたしは民ちゃんの子もりをひき受けます。姉が、いそがしいので、おしめカバーをさせたままほっておくと、民ちゃんは平気でそこらをはいまわっています。わたしは時間をはかつては、そとさえ寒くなければ、ものかげへつれていって、用をたさせるようにしました。

はじめはいやがっていた民ちゃんも、よごれていないほうが氣持がいいので、ときどき、わからないことばで、わたしに知らせるようになりました。

ねえさん、たいへんな進歩ですよ。いまにもう失敗もなくなるようにしてみせます。

「ありがとう。いそがしいものだから、ついしつけができなくて。」

民ちゃんは、つくえ

とか、テーブルとか、

なにかとりつく物があ

るとすぐに立ちあがっ

て、そのまわりをぐる

ぐると歩きます。ちゃ

ぶ台をだして、食事の

用意などをしていると、

とりついてぐんぐんおしていつて、かべぎわにおしつけてしま

まったりします。けれども、かんじんの歩くことはまだできま



せん。たった九十センチぐらいのところでも、こっちからあつちへいくとすると、すぐに手をついて、いざり歩きになります。かた足をなげだして、おしりでいざって歩くのです。

たいへんおそいようですが、いざりだすとなかなか早いものです。いまそこにいたかと思うと、もう次のへやにはいつているといふように、すこしもゆだんができません。

立ちはじめには、物を持たせると立つことができると、だれかがいったことを思い出しました。それで、わたしはおべんとうの包みをこしらえて、

「民ちゃん、これ持って学校へいきましたよ。」

「といて、民ちゃんに持たせてみました。」

「ガッコ、ガッコ。」

民ちゃんはうれしそうに
いって、その包みをと
りあげると、よちよちと
立ちあがりました。

「ばんざい、ばんざい。」

「さあ、いっちょよにいき

まちょうね。」

たもとをひいてやると、

民ちゃんは、ぱったりそ

こへすわりこんでしま

ました。

「だめねえ。さあ立った

して。」

立ちあがると、民ちゃんは、はじめて二足ほど歩きました。

こんなふうにして、毎朝おべんとうをこしらえて持たせてい
るうちに、民ちゃんは三足四足と歩けるようになりました。

ある日、学校から帰ってくる時、姉が大きなわぎをひきました。
「ゆだんができないわ。いま、民ちゃんがひとりでおかっけて口
から地面におりて、わたしのげたをひっかけて、正男のあと
を追っかけて道まででていたのよ。」

「まあ、そう。でも、いつそんなことを覚えたんでしよう。た
いへんな進歩じゃないの。」

わたしはそういいながら、このごろふとつてきて愛らしくなっ
た民ちゃんをだいてやろうとすると、かぶりをふって、



「オソト、ワンワン、チロイ、
というのでした。

おとなりで、このご
ろ白いいぬをかうよう
になりましたが、民ちゃ
んは、そのことをいう
のでしよう。



「チロイ、ワンワン、
チツポ——

ワンワン、ゲタ ナイ、アンヨ、イタイ、イタイ。
民ちゃんのことば数のふえるのには、おどろいてしまいまし
た。

四 光を求めて

(一)

私の一生を通じて、わすれることのできないいちばん大きな
日は、サリバン先生がきてくださった日であります。それは一
八八七年の三月三日、私が満七さいになる三ヶ月まえのこと
でありました。

この日の午後、私はなんとなくものを待つ氣持で、じつとげ
んかんにたたずんでいました。午後の日光は、げんかんをおおっ
たすいかずらのしげみをもれて、みあげる私の顔に降りそそい
ていました。もう、めばえそめたそのなつかしい葉や、花の上

を、私の指はまったくわれをわすれてなでていました。私は、
どのようなおどろきとふしぎが私を待っているのか、すこしも
知りませんでした。

私は、近づいてくる足音
を感じましたので、それが
母だとばかり思いこんで、
両手をさしだしました。だ
れかがそれをとらえました。
そうして、次のしゅん間に
は、私は、先生——私の心
の目をあらゆるものに向けて開いてくださるため、いいえ、そ
れよりもなによりも、私を愛するため生きてくださった——そ

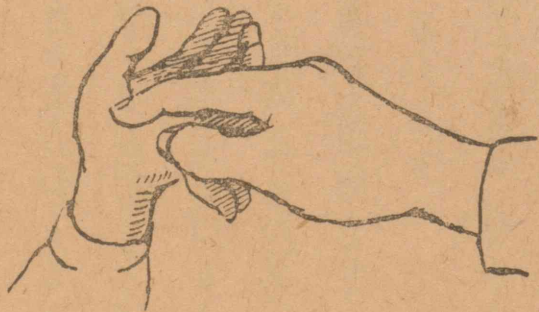


のかたの両うでの中に強くだきあげられました。

サリバン先生は、お着きになったあくる朝、私をおへやに呼
んで、一つの人形をくださいました。私がしばらくその人形と
遊んでいますと、先生は、私の手に、

「人形」という文字をつづられました。

私は、すぐこの指の遊びがおもしろく
なって、それをまねようと思いました。
とうとうじょうずにつづれましたとき、
私は子どもらしい喜びと得意さに大は
しゃぎで、二階から母のところへかけ
おり、指さきで人形という字をつづってみせました。
そのとき、私は、もちろん、ことばをつかっていることや、



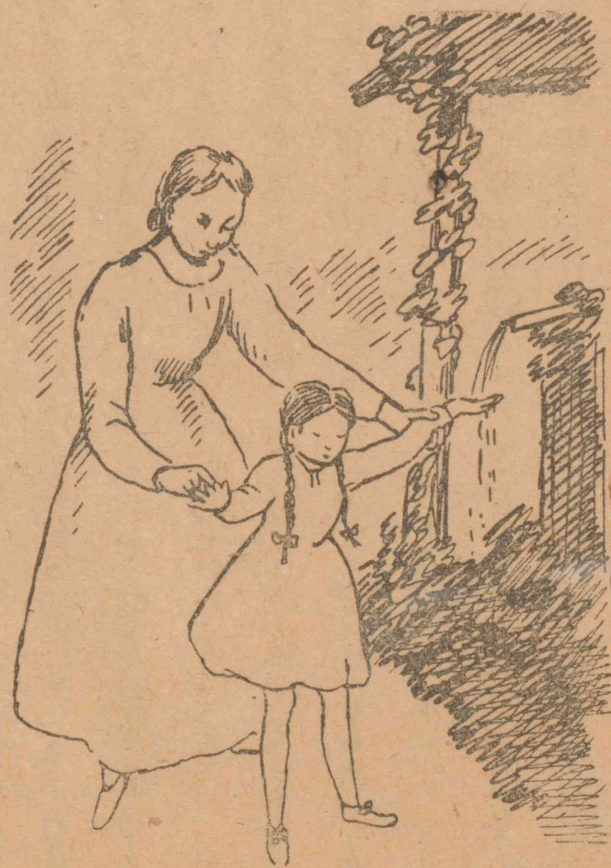
そんなものがこの世にあることさえ知らず、ただ、さるの入まねのように指を動かすだけでした。

それからいく日かのあいだに、なんのこともわからないうちに、私は、「ピン」「コップ」「ぼうし」など、たくさんのことばをつづることを覚え、「すわる」「立つ」「歩く」など、すこしばかりの動詞も知りました。けれども、物にはそれぞれ名まえのあることを知ったのは、先生がおいてになってからいく週間もたつてからのことでした。

ある日、私が新しい入形を持って遊んでいますと、サリバン先生が、ほかの大きな入形を私のひざの上において、「入形」という字をつづりながら、二つとも同じ名であることを私にわからせようとなさいました。

その日はすでに、私は、「ゆのみ」と「水」とでたいへん苦しんだあとでした。サリバン先生は、「ゆのみ」が道具で、「水」がその中にはいつているものであることを、はっきり教えるために苦しまれたのですが、私は、いつまでたつても区別ができませんでした。先生は失望して、一時やめていらつしやいましたが、こんどは、二つの入形が同じ名まえであることをわからせようとなさいました。私は、とうとうかんしゃくをおこして、新しい入形を手にとって、ゆかにたたきつけました。そうして私は、くだけた入形のかけらを足さきに感じながら、ゆかに思いました。私は、先生がかけらをいろいろのかたすみにはきよせておいてになっているようすを感じましたが、ただ、腹だちの原因がどりのぞかれたという満足を覚えたばかりでした。

しばらくして、先生がぼうしを持ってきてくださったので、私は暖かい日なたにでかけるのだと知って、おどりあがりました。ふたりは、いどの小屋をおおっているすいかずらのあまいにおいにひかれて、庭の小道をおりていききました。だれかが水をくみあげていましたので、先生は私の手をどの口の下へやりました。冷たい水がいきおいよく流れているあいだに、別の



手に、はじめのはゆっくりと、次には早く、「水」という字を書い
てくださいました。私は、身動きもせず、立ったままで、全身
の注意を先生の指の動きにそそいでいました。
ところがとつぜん、私は、なにかしらわすれていたものを思
いだすような、めばえてこようとする心のはたらきといったよ
うなあるふしぎなものを感しました。このときはじめて、「水」は
いま自分のかた手の上を流れているふしぎな冷たいものの名で
あることを知りました。

この生きた一ことが、私のたましいを目ざめさせ、光と希望
と喜びとを興えることになったのです。

こうして私は、物にはみな名まえのあることがわかったので
す。私の手にふれるあらゆるものが、生命をもつて動いている

ように感じはじめました。

それは、先生が興えてくださった新しい目で、すべてをみるようになつたからです。

へやに帰るとすぐ、私は、自分がこわした人形のことを思いだして、いろりのかたすみに走りよってかけらをひろいあげ、それをつぎあわせようと思いました。がだめでした。

私の目にはなみだがいつぱいたまりました。自分のしたことがわかつたので、生まれてはじめて、くやむ心と悲しみに胸をさされました。

私はその日、たくさんのことばを覚えました。全部覚えてはいませんが、その中には、「父」「母」「妹」「先生」などのことばがあつたことを思い出します。

できごとの多かつたこの日もくれて、小さなベッドに横たわりながら、この日が自分にもたらした喜びを思い返していたとき、私ほど幸福な子どもを発見することは、むずかしいでしょう。私は、生まれてはじめて、きたるべき新しい日を待つことを知りました。

(二)

これは、ヘレン・ケラーというアメリカの女の人が書いたわが生がいの一せつを、日本語になおしたものです。

よんでわかるように、ケラーは、めくらで、そのうえつんぼでした。それなのに、こんなりっぱな文章が書けるといふことは、なんとすばらしいことではありませんか。

ケラーは、生まれて一年半ほどたったとき、大病にかかって、みるはたらき、きくはたらきを失いました。みることもできず、きくこともできず、話すこともできないので、氣持があらあらしくなり、かんしゃくもちになったのもむりはありません。ケラーの両親は、なんとかして、すこしでもものわかる子どもに育ててやりたいと念じて、もうあ教育に経験のあるサリバン先生にきていただくことにしました。

サリバン先生が、このあらあらしいわけのわからないケラーをしつけていくのには、なみなみならぬどりよくがいました。しかし、ケラーに「ことば」というものをわからせることによつて、そのまっ暗なさびしい心を明かるくすることに成功しました。だんだんちえがつき、もの心がついて、学校に行くようにな

りました。もちろん、サリバン先生に手をひかれ、ふたりがひどりのようになつて、勉強をはじめたのです。手のひらに文字を書くことから、進んで、手と手をにぎりあひ、そのにぎりかたによつて「ことば」をとりかわすようになりました。

ケラーは、もうサリバン先生なしには、生きていけません。先生も、

「私が命がけてせわをすれば、ケラーさんがすくわれるのです。」



どうぞ神さま、おまもりください。
といのりながら、一生をケラーのためにささげました。
そののち、ヘレン・ケラーは、大学をりっぱな成績で卒業し、
はかせにまでなりました。これは、ケラーのサリバン先生に対
する信頼と、サリバン先生のケラーを思う愛情とが、一つになっ
たおかげです。



五 人形しばい

動きの世界

「ふしぎだなあ。
なにが。」

「ねえ、おじさん。とこのまの人形が、動きだしそうな気がす
るんだけど——」

「そうだね。おどりだしそうにみえるね。」

「いつかおじさんからいただいた童話の本に、人形が夜中に集
まっておどりだす話がありましたよ。」

「この人形だって、みんながねしずまったあとで、動いている

のかもしれないよ。

「ほんとう、おじさん。」

「さあ、人形にきいてごらん。はははは——でも、動く人形だつてあるよ。一雄くんは、人形しばいをみたことがあるかね。」

「人形しばいって、人形がしばいをするんですか。」

「そうだ。もちろん人が動かすんだがね。日本には、文楽といつて、りっぱな人形しばいがある。その人形などは、長さにすれば一メートル以上のものもあるが、まるでたましいがはいつているように動くよ。」

「へえ、そんな大きなものを、どうして動かすんでしょう。」

「人形つかいといわれる人がいて、ものによっては、三人がかりで一つの人形を動かすんだ。からだ全体と右手を受け持つ

人、左手だけの人、足だけの人と、それぞれ手わけしているんだが、まゆ毛も、目も、口も動くし、ときには、したをだしたり鼻がてんぐのようにとびだすこともある。人形はものをいわないが、そのかわり説明がついている。ほら、分家のおじいさんの大すきなじょうりさ。あれにあわせてしばいをするんだ。」

「おもしろいでしょね。」

「そりゃ、おもしろいさ。人間のしばいとちがつて、みていると別世界にいったような楽しい氣がするよ。」

「文樂のほかはまだあるんですか。」

「あるとも。いまいった文樂は手てつかうのだが、そのほか、指てつかうもの、ぼうてつかうもの、糸であやつるものなど、

いろいろ種類がある。あやつりは文楽よりもっと古くからあつたし、おじさんの子どものころ、よくみたものだよ。あのこ



ろは影絵もあつたよ。

「影絵ってやっぱり人形のしはいですか。」

「日本ではあまりさかんでなかったが、」

アジアでもヨーロッパでも、りっぱな

影絵しはいができています。ジャワのも

のはとくに有名だね。牛皮を切りぬい

て、美しい色がつけてある。これに光

をあてて影絵にしてみせるのだが、人

間ばかりでなく、動物などもでてくる。それが音楽や歌にあ

わせてしはいをするわけだ。」



「人形しはいって、いろんな國にいろんなものがあるんですね。だいたい人間には、顔の色やくらしかたがどんなにちがっていても、心にあることを、なにか美しいものであらわそうとする氣持がある。だから、人間がいるところには、かならず詩もあれば、絵もある。音楽もある。命のない人形を思うま

まに動かして、喜びや、悲しみや、傳説や、歴史やを美しく舞台にあらわそうとする望みもあるのだ。」

「でも、生きた人間のほうがうまくやれるし、それに便利でしよ

う。」

「便利とか不便だけで物事を考えないところに、人間の美しさやおもしろさが生まれてくるのだ。たとえば、わざわざ絵のぐをつかって時間をかけて絵をかくより、写真のほうがずっ

と便利なわけだけけれど、絵には絵のいいところがあるからね
ところで人形しばいたが、これは人間にできないことでも平
氣でやれる。空をとんだり、すがたを消したり。それに、人
間みたいに不平やわがままをいわないからね。
「そりゃ、そうですわね。」

「そのうえ、手がるでおもしろいし、自分で作って自分で動か
すのは楽しいものだよ。こうえんでも教室でも、どこでもや
れるからね。きみもひとつ、作ってみるといいよ。」
「できるかしら。」

「できるとも。簡単な人形の作りかたを教えてあげよう。お友
だちとやってごらん。」

一雄の手帳から

一 指人形の作りかた

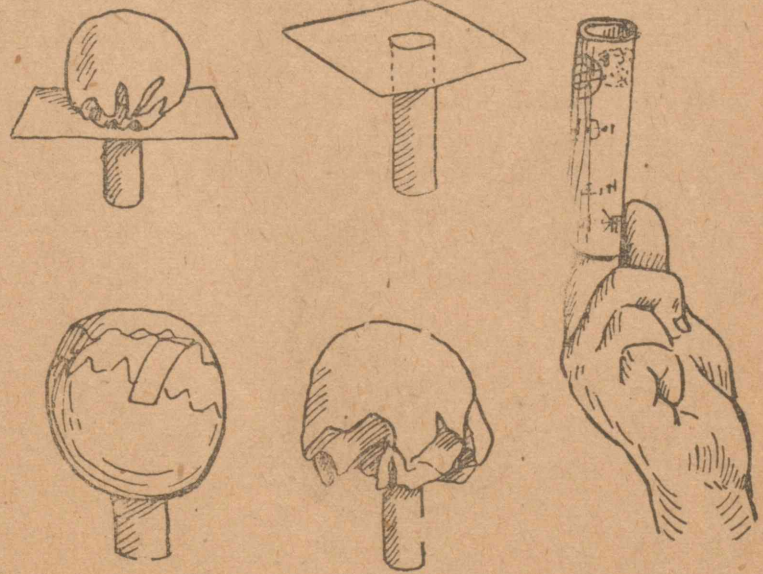
1 材料。

古はがき一まい。 古新聞二まい。 日本紙。 のり。
絵のぐ。 いたぎれ。 古ぎれ。

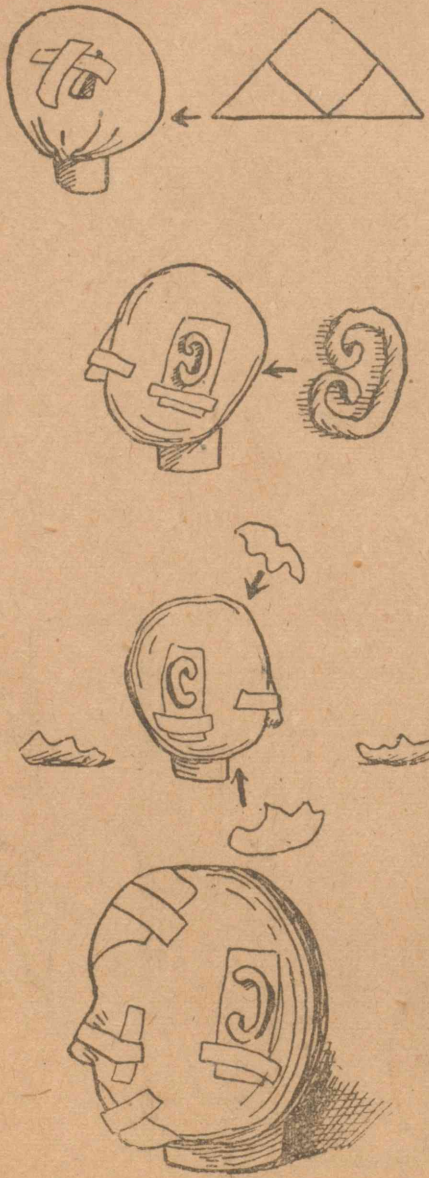
2 顔の作りかた。

- (1) 古はがきを横にまいて、ひとさし指のふとさのつつを
作り、のりでとめる。
- (2) 古新聞を二まいとも八つに切って、そのうち一まいだ
けを正方形にする。ほかのはよくもんでのばしておく。

- (3) 正方形の一まいにのりをつけてつつにかぶせる。
- (4) 首のところだけのこして もんだ紙にのりをつけないで、上から上からかぶせる。
- (5) 首のほうからもかぶせてまるくしてから、細長く切った古新聞にのりをつけてとめる。
- (6) 鼻や耳、ひたいやあごの形も、古新聞で作って、



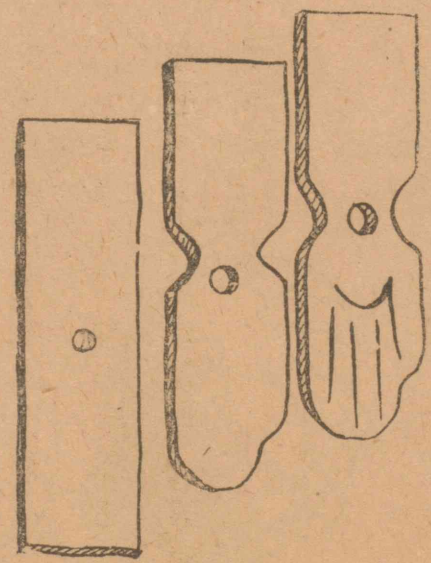
- のりでとめる。
- (7) 日本紙を細長く切って、一まい一まいによくのりをつけてはりかためる。



- (8) よくかわかしてから、絵のぐで、顔をかいたり頭の毛をぬる。

3 手の作りかた。

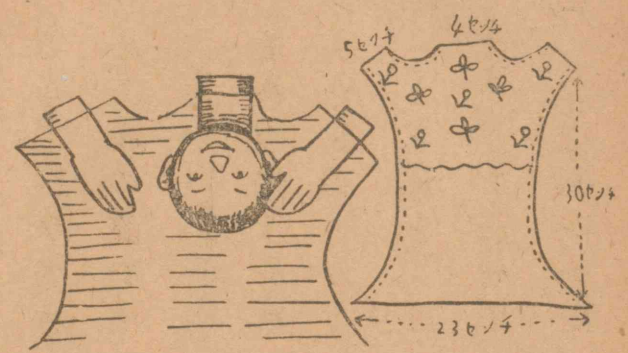
- (1) いたぎれを、はば二センチ、長さ九センチくらいに切つて、まん中にあなをあける。
- (2) あなの両わきを切りこんで、手さきをまるめ、指の線をほる。



4 着物の作りかたと手のつけかた。

- (1) 古ぎれを、はば二十二センチ、長さ三十センチぐらいにつぎあわせて、図の形に切る。これを二まい作る。
- (2) 二まいあわせて、図の点線のところをぬう。

二 人形のつかいかた



- 1 ひとさし指を首の中に入れ、おや指となか指を、そでの中、いたのうしろがわにいれる。
- 2 人形だけを舞台へだして、つかう人の顔や頭がみえない

- (3) 顔は、着物のすそからさかさに入れて、首を着物にぬいつける。
- (4) 手は、手さきのほうをいれて、穴に糸を通してぬいつける。
- (5) 顔と手をつけた着物を裏返すとできあがる。

ようにする。

3 人形がかたむかないように、話すときは人形の顔を前後に動かす。

三 舞台の作りかた

1 つくえやいす

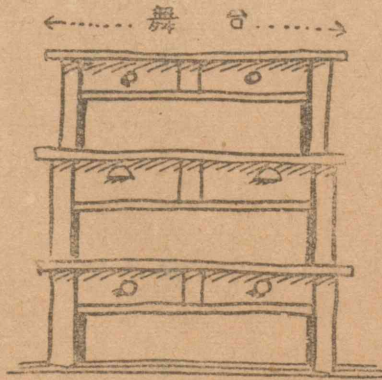
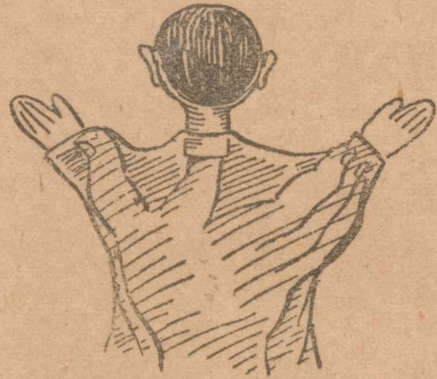
を重ねて、つか

う人のかくれる

ところを作り、

まくでかくす。

2 舞台の上には、紙やいたぎれて、木や家を作っておく。



六 傳説

先祖代々住みなれた土地はもとよりのこと、自分の生まれたところは、なんともいえない暖かい感じのするものである。なつかしい山や、おもむきのある川などがあるためばかりではない。子どもどものときからききなれた傳説が、そのあいだにありこまれていくからである。傳説には、正しい歴史にもとづいたものもあるが、昔からいい傳えられたというだけのもののほうが多い。また、文章に書きつづられて有名になったものもあるが、ただ人々のあいだで語り傳えられているだけで、そういう人たちのなくなるにつれて、順々に消えていってしまうものもある。

それで、おじいさんやおばあさんからきいた話を思いだして、書きのこしておくということは、ただおもしろみがあるばかりでなく、とうといことである。

傳説を廣く全國で調べてみると、よくにたよりのものが、あちらこちらで発見される。その中には、世界に共通なものさえある。次にいくつかの例をあげてみよう。

みそ五郎

昔、島原にみそ五郎という大きな男がいた。みそ五郎は、雲仙岳にこしかけて、ひなたぼっこをしながら、まへの海で顔をあらうのを楽しみをしていた。

雲仙岳の中ほどにある唐の池は、みそ五郎が畑をうったとき、のくわのあとで、そのとき落ちた土くれが、有明海の中にある湯島であるという。

九十九の石だん

秋田縣の男鹿半島に、神山、本山という二つの山がある。どちらもけつしてたやすくは登れないが、ふしぎなことに、神山のほうには、昔から九十九だんの石だんができている。すばらしい大きな石だんで、とても人間わざではない。

昔、神山のおくにおにが住んでいて、毎年村にあらわれては、田や畑を荒らすので、村の人たちは困りはて、おにに向かつて、一つの難題をもちだした。それは、おにが一夜のうちに百だんの石だんをきずきあげること、もしそれができなかつたら、

これからのちは、けっして村へてきてはならない、もしそれができたら、毎年ひとりずつ、おにに人間をくわせてやるというのであった。

おには、これを承知して、ある夜、石だんをきずきだした。なにしろ、いっしょうけんめいであるから、みるみるうちに工事がはかどって、九十九の石だんができてあがった。ところがいま一だんというところで、いちばんどりが鳴いて、東の空が明かるくなった。おにはおどろいてすがたを消してしまった。おには約そくをまもって、そののちはもう田畑を荒らすよう



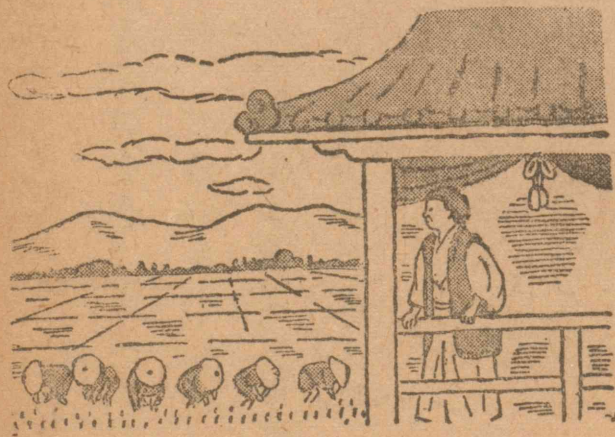
なことはなくなつた。

湖山の池

鳥取の西方約四キロのところ、まわり十二キロの湖がある。これが湖山の池である。

昔、この里に長者がいた。一代二代はいい入で、よくさかえたが、三代めの長者は、先祖のことを鼻にかけて、わがまをしはじめた。

ある年の夏、きょうは長者の家の田植えだといふので、里のおとめたちは、赤いたすきもかいがいしく、朝から集まっ



てきた。

長者は、なんと思つたか、なん千アールの田をきよう一日で植えてしまえといいつけた。里の入たちはおどろいたが、いいだしたことはあとへひかないので、おとめの数をまして、田植え歌勇ましく、一心にはたらいた。長者は、高どのの上からこのありさまをながめて、得意になっていた。



ところで、もうあとわずかというところで、日ははや西の山に傾いて、くれそうになつてきた。このとき、高どのに立っていた長者は、日のまるのおおぎをあげて、しずみかけた日をさしまねくと、さすがの太陽も、まねかれるままに空の中ほどまでもどつてきた。それで、のこりの田植えも無事にすんで、長者の望み

はとげられた。

ところが、そのあくる朝ながめると、高どのは消えてしまつてあとかたもなく、きのう植えたなん千アールのあの美しい田さえなく、みわたすかぎりさざなみがうちよせる大きな池となつていた。

家具の岩屋

徳島縣の津峯山に、家具の岩屋というのがある。昔、あるまじしい人が、ふとしたことから、この岩屋からぜんやわんなどの家具のであることを知つた。それからというものは、いり用のときはいつもここへきて、岩屋の入口で頼んだ。そうしてよく日いつてみると、頼んだ品物がちゃんとそろつてならんでいた。

そのことが評判になって、だれもかれもかりにいくようになった。その中にわるい人がいて、かりた家具をかりっぱなしにして返さなかった。

そののちは、だれがなんと頼んでも、かしてくれなくなったという。

十和田湖

十和田湖の近くの奥瀬村に、ひとりの木こりがいた。名を八郎と聞いた。ある日のこと、八郎が山でしごとをしていると、のどがかわいてきた。

水を飲もうと思つて小川の岸にてみると、美しい小魚がおよいでいる。八郎はその魚をとつてやいて食べた。

小魚はしおからかったので、のどがかわいてたまらない。そこでまた川の水を飲んだ。いくら飲んでものどのかわきがとまらなかつた。

そのうちにからだがだんだん長くのびて、おしまいにはびになつてしまった。家にはひとりの母がある。母にそのからだをみせるにはしのびない。また入にみられるのもこまる。

八郎は思い切つて、水ぞこにとびこむと、小川がひろがって、みるみるうちに湖となった。それが十和田湖のおこりだということである。



七 みえない力

根

葉は青く、

くきは長く、

みきは高くそびえているが、

根はちつともみえない。

花は美しく、

実はうまい。

しかし根はちつともみえない。

根のさきは毛より細い。

毛よりもやわらかだ。

その細いやわらかなものが、

地をうがち岩をおしわけ、

深く廣くのびていく。

のびていく根のさきをさえぎるものはなにもない。



おおづなのようなたくましい根が、
深くのびてみきをささえ、
廣くのびて枝をやしない、
それからた細かい根が、
つなのようにからみあって、
葉を育て花をさかせる。

根はみえない。

みえないが深くて長い。

深くて長い根の上に、

みごとな草や木がしげっていく。

のこぎり

のこぎりには、はがある。

のこぎりのはは、

いぬの歯のようにとがって、

一つおきに右と左にすこしよじれて、

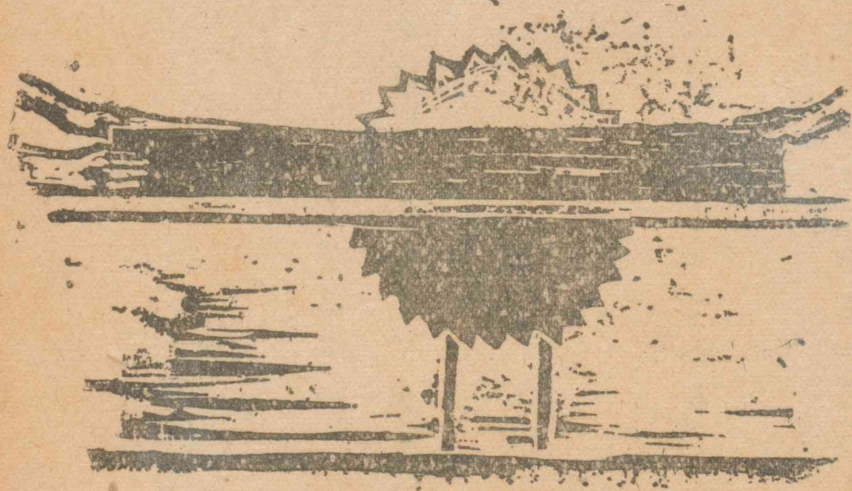
二十も三十も続いている。

五十も六十も続いている。

のこぎりのはは、

いつもやすりをかけて

右と左によじっておかないと、



なんの役にもたたない。

のこぎりは、

あつみをもっている。

大きなかたい物を切るのこぎりはは、大きくてあつい。

小さなやわらかい物を切るのこぎりはは、小さくてうすい。

糸のこは糸のように細く、

ひきまわしはひじょうにせまい。

まつすぐに長く切るのこぎりは、廣いはばをもっている。

こびきの大のこははばが廣いし、

製材所のまるいのこぎりも、大きなさしわたしをもっている。

はたらきのある人は、

はをもったのこぎりになている。

しかし、いつも勉強してみがきをかけていないと、

じき、役にたたなくなる。

どんなにはたらきがあつても、

それにあつみと

廣さがなかったら、

正しくりっぱに世の中をわたることができない。

八 雪まろげ

深川ふかがわの芭蕉ばしやうの家の近くに、曾良そらという人が住んでいました。

曾良は、信州しんしゅうの人で、歌がたいそうじょうずでしたが、芭蕉のことをきいてから、その弟子になりました。そうして、はい句を勉強することに心をきめました。

曾良は思いました。芭蕉はたったひとりで住んでいて、なにかにつけて不自由であろうから、いろいろお手傳いをしてあげたい。下男のように住みこんであげてもいいけれども、芭蕉はひとりしずかにしているのがすきだというし、家もせまいので、自分は、その近所に別に家をかりて住むことにしました。

そうして、毎朝早くきては、芭蕉のおきないうちに、いどころ水をくみあげたり、ごはんをたいたりしました。また、まきが少ないと、近所へ木をひろいに行ったりしました。このようにして芭蕉につかえながら、はい句の話をきくのでした。先生の近くにいればこそ、毎日教えてもらえるので、これがなによりうれしいと、曾良は喜びました。

そのうちに、冬がきて、くもった空がひくくたれる日が続きました。芭蕉はからだがよくないので、寒さは身にこたえました。雪をみるのが楽しみでした。芭蕉は、くもった空をおおぎながら、雪が早く降るといいなあと待ち遠しがっていました。そのあたりに遊んでいる子どもたちも、同じ氣持でした。また、なにも降ってきもしないのに、

「雪やこんこん、あられやこん
こん。」

などと、はやしたてていました。
芭蕉は、子どもが大すきでし
た。そのあたりにいるのは、川
べりにある船大工の子どもや、
のりをとりにでるりょうしの子
どもたちで、どれも身なりはき
れいではないのですが、芭蕉は
いつも遊び友だちにしていまし
た。

「みんなは、雪が降ったら、な

にをして遊ぶの。」

「雪だるまを作るの。」

「じゃあ、おじさんも手傳つてあげよう。
話をしているうちに、パラパラと音がして、白い小さなつぶ
つぶのものが落ちてきて、子どもたちや、芭蕉の足もとに落ち
て、はね返ったりころがったりします。」

「やあ、あられた、あられた。」

子どもたちは、小さな手をしゃくしにして、受けようとしま
すが、あられはその手にはのらないで、顔にあたりたりふとこ
ろにとびこんだりします。芭蕉は、にっこりわらって立ってい
ましたが、子どもたちのかけていく方に、自分もいっしょにか
けだしたいと思いました。



いざ子ども走りあるかんた
まあられ

芭蕉の待ちに待った雪が、
とうとうくれがたから降って
きました。みるみるうちにつ
もりましたが、曾良が水をた
くさんくんでおいてくれたし、
まきもたくさんとってきてく
れてあるし、そのうえ、台所
の米入れの大きな入れ物もか
なり重いので、二三日は困る
ことありません。



ふだんは筑波おろしがさわがしく、雨戸をゆさぶったり、大
川の波の音がバサリバサリと、まくらにひびくのでしたが、そ
の夜は、すべての音も雪にうずめられたようなしずかさでした。
そのしいんとしたしずかさの中に、芭蕉は心をすませ、雪の匂
を考えました。

トントン、トントンと入口をたたく者があります。

「先生、もうおやすみですか。」

その声は、毎日ききなれてゐる曾良の声です。芭蕉はすぐ戸
をあけました。

「こんな降るのによくきたな。」

「先生は、おひとりですらどうしていられるかと思つて、どうして
もこぼすにはいられませんでした。」

「友だちがほしくなるのはやはりこんな晩だ。まあ、火をたきつけておくれ。」

やがていろりには、パチパチとしばがもえあがります。

「先生、今夜の雪の匂はいかがですか。」

「匂か、まだできない。だが、みせるものがあるよ。」

芭蕉は、えんがわにいつてなにか持ちだしてきました。それは

は、赤いおぼんの上に、雪をまるめてこしらえたうさぎでした。

なんてんの実が、赤く、うさぎの目らしくいれてありました。

曾良は、芭蕉の子どもらしい手すさびがすっかりうれしくな

りました。ふたりは子どものようにわらいました。

きみ火をたけよきものみせん雪まろげ

九 テニス

少年

メキシコのテニス選手キンゼーと私とが、いよいよ試合をする日のことでした。テニスコートには日本とメキシコの国旗が美しくひるがえって、きょうの戦いを物語っています。スタンドには、はじまるまえからたいへんな見物入でした。時間がせまったので、私はユニホームをつけて、練習のためにコートにでました。すこしばかり手ならしをしてから、休けい場にもどってくると、中國人らしい十一二の兄弟にサインを頼まれました。

その少年たちは、じょうずにえい語をつかって頼みました。私は、その少年の持っていたペンをかりて、サインをしてやりました。

少年たちは、これを見て、うれしそうに、えい語で、

「きょうは、きっと勝ってください。」

といました。

私は、いままで試合のまえにこんなふうにはげまされたことはありませんでした。あまりかわいい少年だったので、よくみていますと、どこかしら日本人らしいところもあるので、

「きみたちは日本人ですか。」

とたずねました。ふたりの少年は、にっこりとわらって、

「そうです。」

とはっきり答えました。

「そうだったのかい。きみたち

は、日本語を知っているの。」

「いいえ。」

「どこで生まれたの。」

「セントルイスで。」

「日本へいきたくない。」

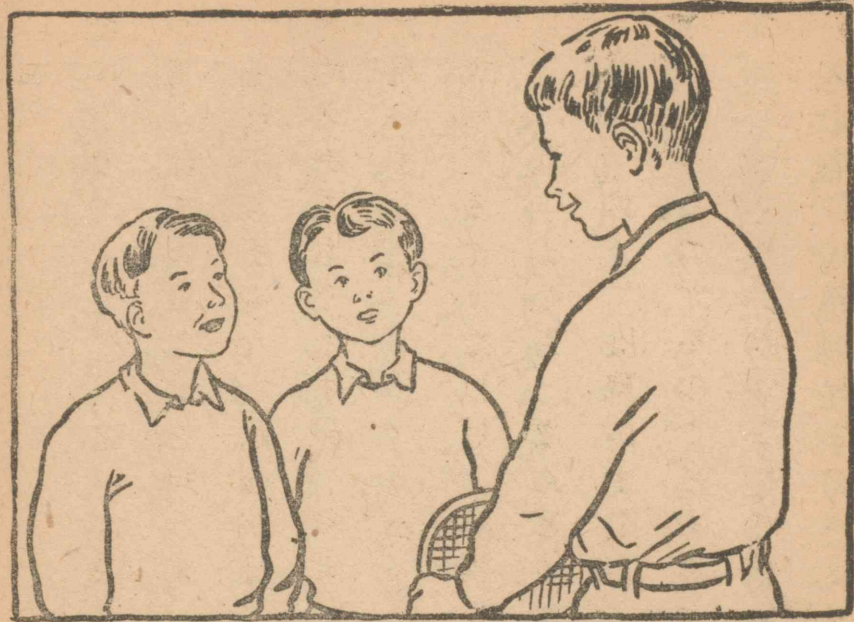
「いきたくありません。」

「どうして。」

「友だちがないから。」

「じゃあ、きょうのテニスの試合には、どちらをおうえんす





るの。キンゼー選手はセント
ルイス生まれだよ。
こう、私がたたみかけるよう
にたずねたとき、少年たちは、
「オフ コース、フォア ジャ
パン。サー！」
「いうまでもなく、日本ですよ。
と、ことに「ジャパン」ということ
ばに力をいれて答えました。そ
のひとみの中には、「なぜ、そん
なことをきくのか。」という色が
あらわれていました。

日本という國をみたこともなく、また日本語をすこしも話せ
ないこの二少年が、遠い母國の選手のために、勝つことをい
つてくれていることを知って、胸がいつぱいになりました。
それからまもなく試合がはじまりました。キンゼー選手は世
界的名手でありますが、私もどうしても勝たなければならな
いと思われました。

火のでるようなはげしい試合が続きました。三時間もぶつと
おしに戦いました。なんどもコートでたおれました。たおれて
はおき、おきては戦いました。私はスタンドから一心におうえ
んしている二少年のことを思つては、ふるいたつて戦い、どう
どう五セットで勝つことができました。私はいまでも、あのと
きのことをわすれることができません

やわらかなボール

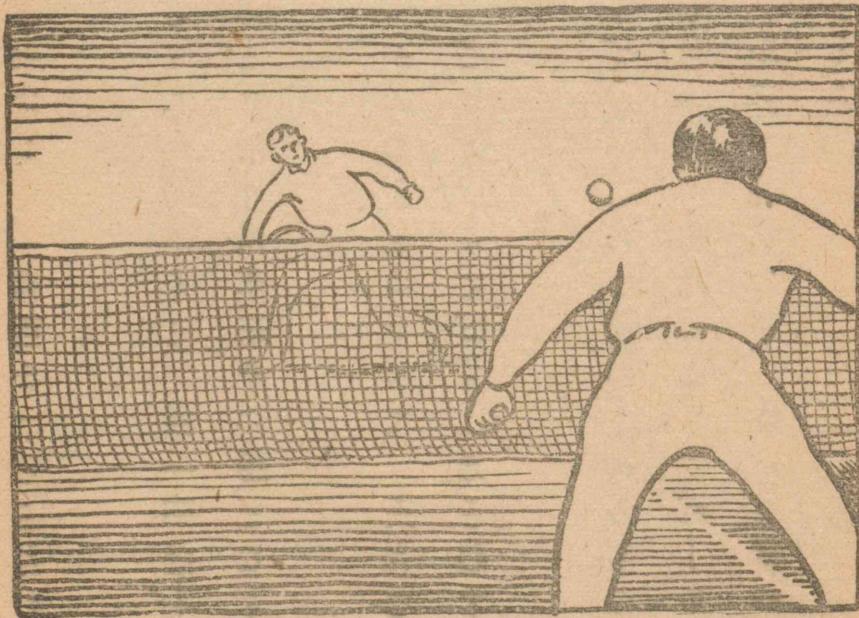
五月、六月、七月、八月の四ヶ月にわたって、十一ヶ國のテニス選手をなぎたおした清水選手は、最後の決勝戦にのぞむことになりました。もし、この決勝戦に勝つことができたら、世界のほまれ、デビスカップを、日本では、はじめてもらうことになります。

清水選手の相手はチルデン選手でした。チルデン選手は、アメリカきつての名手です。身長は一・八七メートル、みるからにりっぱな体格は、小さな清水選手のおよぶどころではありません。それでも、この清水選手の試合を見物しようと、方々の國の人々が、そのコートを目がけて集まりました。

まっ白い線のひかれたコートには、日ざしがさんさんと降りそそいでいました。そこへ両選手があらわれました。スタンドの入たちは、われるようなはく手をふたりに送りました。

プレー。

試合がはじまりました。目にもとまらぬボールが、ネットの上を右に左にと、ゆききしました。ボールはたましいのこもつた生きもののようになって、は



ねとびました。一つのボールを中心にして、両選手はどぶ鳥のようにかけまわりました。

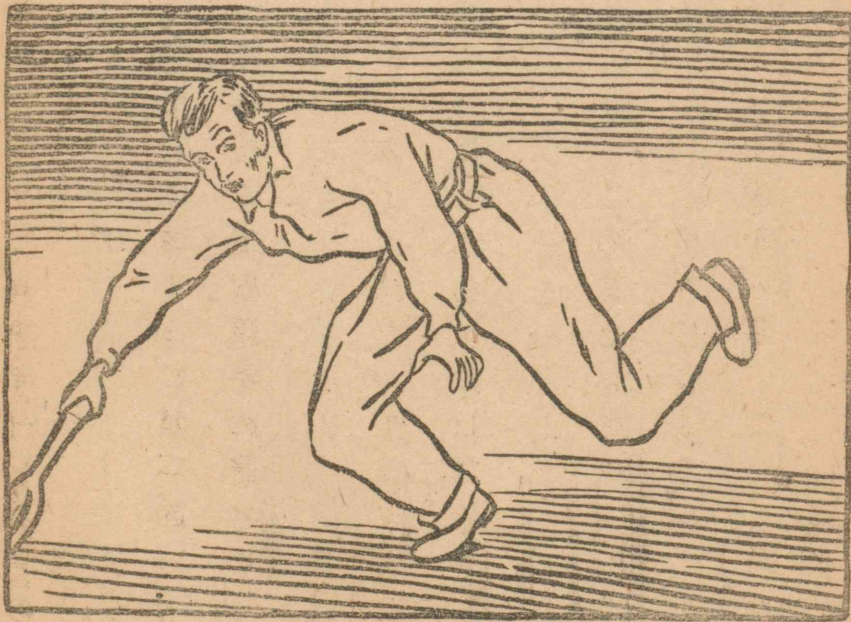
かたずをのんで試合をみているうちに、早くも、第一回は七―五で清水選手が勝ち、第二回めもやはり清水選手の勝となりました。

あの小さいからだ、まほうつかいのようになって、大きなチルデン選手を追いつめるものすごさは、ことばではあらわすことができません。

しかし、さすがにチルデン選手です。このままおされるものではありません。もう然とたちなおって、電光のようなボールをうちだしました。第三回めはチルデン選手の勝、続いて第四回めもチルデン選手の勝となりました。

見物人は、いよいよ手にあせをにぎりました。ところが、試合のまっさいちゅう、どうしたはずみか、チルデン選手はかた足をふみすべらせてしまいました。そうして、いまにもころびそうになりました。

相手を一きよにうちのめすぜつこのチャンスです。チルデン選手もそのおうえん者たちも、もうあきらめているときでした。清水選手は、ボールをやわらか



くして、しかも受けやすいところに、送ってやったのであります。チルデン選手は、とりみだしたしせいではありましたが、やわらかなボールだったので、無事に受け返すことができ、試合はふたたびはげしいものになっていきました。

つぎつぎと、両選手はしのぎをけずって戦いました。夕日はすっかりおちてしまいました。

わずかな点のちがいで、清水選手の負けとなりました。

ネットをはさんで、両選手はかたいあく手をかわしました。

心おきなく戦いぬいた両選手のために、見物入たちは、しばらく、あらしのようなはく手をおしみませんでした。

十 ことばのはたらき

(一)

父が、

「水を持っておいで。」
という。

庭で植え木の手入れをしている父にこういわれたら、バケツか、じょうろに水をいっぱい入れて持っていくだろう。

手紙を書こうとして、すずりばこをあけた父にこういわれたら、水さしに水をいれて持っていくだろう。

ふる場の中で湯をかきまわしている父にこういわれたら、手

おけに水をいっぱい飲んで持つていくだろう。

ことばは、そのときのまわりのようすや、ゆきがかりや、音声や身ぶりによつて、いろいろにその意味がかわる

「水を持つておいて。」という

簡単なことばでも、相手の入のいうことばのわけをよくききわけて、それによくかなうようにしなくてはならない。

もし、そのわけにかなわない

ことをすれば、たいへんおかしなことになるばかりでなく、そのことばがわかつたとはいえないことになる

話をきくときには、相手の入のいつていることばをよくきき



わけ、のみこまなければならぬ。そうでないと、相手の人に満足を与えることができないうし、また自分の誠意も通じない。

自分が話をするときには、その場のようすによくあうように氣をつけて話さなければならぬ。

ごく簡単な「ありがとう」というあいさつにしても、ほんとうに感謝の心持をこめていうときと、ただとおりーべんのあいさつとしていうときとでは、いいかたもかわってくるであろう。食事のたびごとにいう「いただきます」「ごちそうさま」にしても、そのときそのときの心持があらわれるはずである。そうでなかったら、ただ口さきでいうだけのことになる。ただ習慣としてことばをつかえば、ことばの力がうしなわれていく。それは自分の生活を軽はくにし、相手の入をいやしめることにもなるから

である。

どんなたつといことばでも、ただ口まねをして、おうむのよ
うになえていたのでは、そのことばは、すこしのかも発きし
ないからねんぶつである。

話すことばは、その場その場にあらわれるその人の面影とい
うこともできよう。

(三)

「くりひろいに行った。」

太郎が、こういう短い文を書いた。

太郎はこの「くりひろい」の中に、さまざまな氣持をこめている
にちがいない。天氣のよかったこと、山へいったこと、弟やい

ぬをつれていったこと、くりが
たくさん落ちていたこと、カサ
カサと落ち葉をふんでいったこ
と、小鳥が鳴いていたこと、帰っ
ておかあさんにゆでていただ
いこと、みんなでたべたこと—
—楽しかったさまざまなこと
が、こまかに、この文の中にたたみ
こまれているにちがいない。

秋子も同じように、「くりひろ
いに行った。」と書いた。太郎と
同じ文であるが、その中にたた



みこまれていていることは、太郎とはちがっている。となりの友だちにさそわれていったこと、くりはあんがい少なかつたこと、そのかわりきのこがたくさんあつたこと、りすをみつけて追いかけたこと、もみじの枝をとつてきたこと——そんなことがふくまれている。

ほかの人がこれと同じ文を書いたとしても、そのなかみはおそらく、太郎や秋子と同じではなからう。それは、めいめいの生活や経験が同じでないためである。

みんなが「遠足」という同じ文題で書いても、書かれたことがそれぞれちがってくるのも、やはりこのためである。

しかし、たたまみこまれていているなかみはそれぞれちがっても、「くりひろいに行った」といい、「遠足」ということは、だれにても同じようにわかり、同じように通じる力をもっている。そこにことばとしての性質があり、おもしろさがある。

書くことは、話すこととちがって、その場のようにすが相手にみえないから、ことばづかひやいいあらわしかたには、いつもう氣をつけなくてはならない。前後の続きぐあいをよく考えて、ことばを選び、ひとりがつてんでなく、読み手によくわかるようにくふうすることがたいせつである。

文を書くときには、よく手をいれることもできるし、なんども書きなおすことができる。文をなおすことはつまり心を練ることになる。心を練るほど、ことばがみがかれてくる。

「赤とんぼがとんでいる」

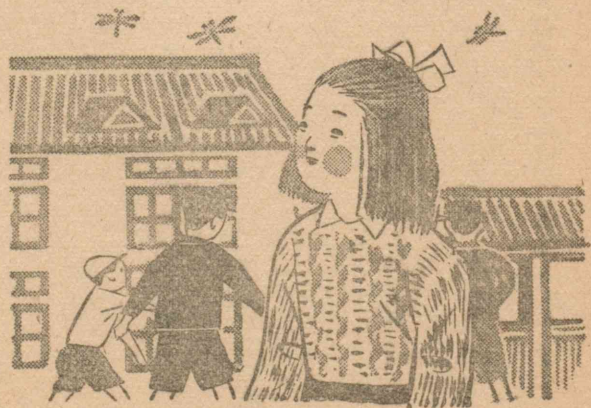
「赤とんぼ」という文字をとおして、すいすいととびまわるかわい
い赤とんぼを、心の中にえがきます。「とんでいる」で動いて
いるようすがすぐわかる。

「赤とんぼ」が「とんでいる」——このようにまとまると、だれ
でも読んで、すぐにそのわけがわかる。それは文字のおかげで
ある。ところがこれを読んだ人々の心には、めいめいちがった
ものが思いだされてくる。太郎は、秋の青い空を赤とんぼがむ
れてとんでいる景色を思い、すすきの野原を心にえがき、自分
もそんなところについて遊んでみたいと思う。

正男は、きよ年のいまごろのことをふと思いだす。弟にせが
まれて、赤とんぼをとりにつけてかけたが、道ばたに野はぎがさい
ていたので、赤とんぼはとらずに、花を手につっぱいつんで帰っ
たことを思う。

秋子は、おと年、この学校にうつつ
てきたときのことを思いだす。だれも
話し相手がないので、しょんぼりと校
庭に立っている。赤とんぼが自分の
まわりをとんでいた。

「赤とんぼがとんでいる」。こんな短い
文であるが、読み手によって、三人三
よう、それぞれちがったことを心の中に思いうかべる。いった
ん読まれてしまうと、読み手の思いでや心持にとかかれて、そ
の人の生活や経験によって生かされてくる。



十一 ある写真帳

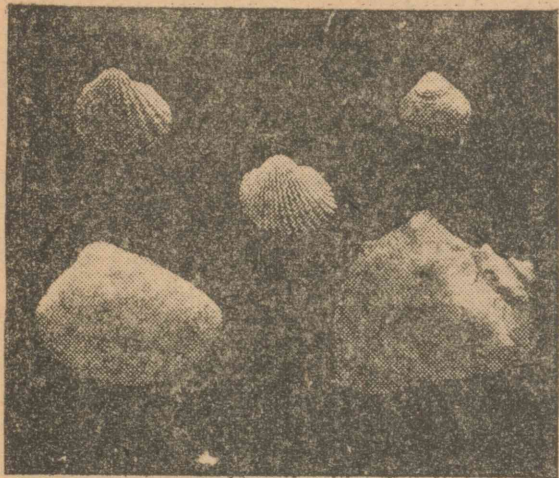
はじめのことば

あなたがたの家に、写真帳があるでしょう。
それにはあなたがたのおとうさんや、おじいさんや、ひいお
じいさんの写真がでていたり、あなたがたの小さいときの写真
などもあるでしょう。

その写真帳をひろげてみると、あなたがたの家の昔からいま
までのことがさまざまに思いだされるでしょう。なつかしいこ
とや、楽しいことや、ときには悲しいことなどもあるでしょう。

次の写真帳は、なんの写真帳でしょうか。
これを見て、どんなことを感じるでしょう。

貝
づ
か



ここに貝がらがあります。みたど
ころ、なんのかわりもない貝ですが、
いまから三四千年もまえの貝です。
四年生のとき習った貝づかのことを
思いだしてください。

貝づかからでる貝は、三百種類に
ものぼりますが、古代の入は、はい
がい、はまぐり、かき、しじみ、あ

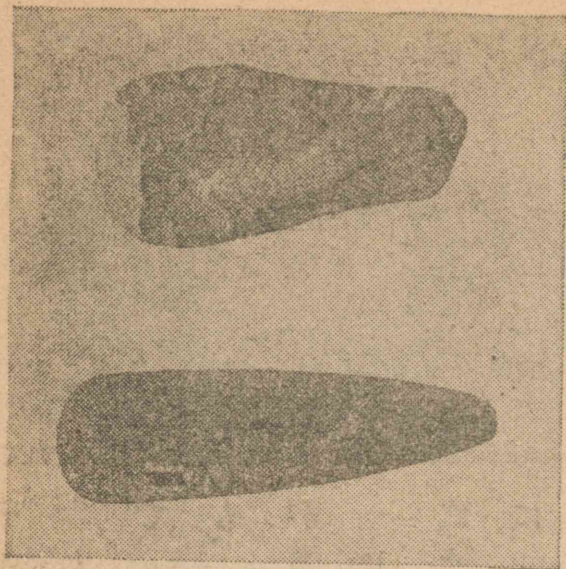
かにしなどをたく
さんたべていたよ
うです。このほか、
魚では、たい、さ
ば、まぐろ、かつ
おなどをたべまし
た。

このように、古
い時代のことがはつ
きりわかる。いとぐちとなったのは、
アメリカのモールストとい
う学者が、東京の大森の貝づかを発見してからのことでありま
す。

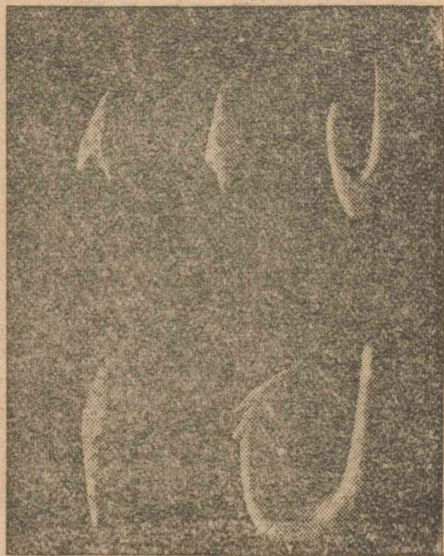


石器と土器

貝づかからでたものをならべてみ
ましょう。石の矢の根があります。



石のお
のもあ
ります。
しかの
角などで作ったつり針もあります。
また、土器もあります。これは、
食物をいれるためのものですが、
もちろん、水をくんだり運んだり



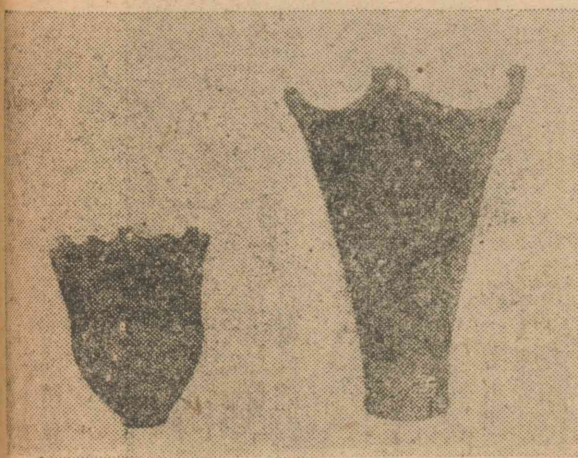


するときにもつかったことでしよう。土器には、なわ目のもようがあるの
で、じょうもん式土器といえます。形
も、かめや、はちや、いろいろのもの
があります。

じょうもん

式土器のほか
に、やよい式

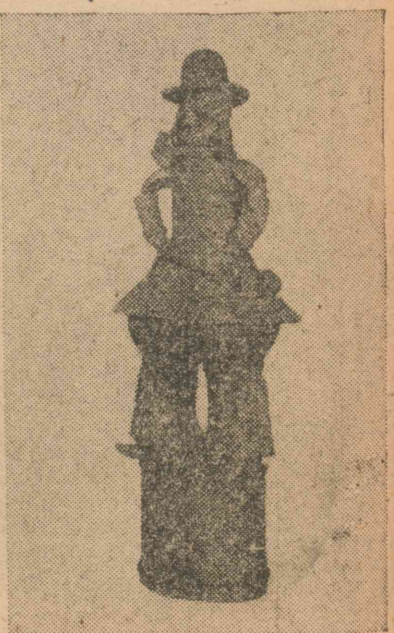
土器というのがあります。それは、も
ようもごくかんたんで、形もたいへん
よくまとまっています。この式の土器
は、はじめ、東京のやよい町から発見



されたので、やよい式土器とい
う名まえがつけられています。

は に わ

この人形は、はにわといつて、
古代人のはかからほりだされた



ものです。赤色のすやきの土人
形で、高さは一メートルほどあ
り、男や女のいろいろなすがた
をあらわしています。手首やむ
ねなどには、まがたま、まるた
まなどがかぎってあります。こ

のやさしいのびのびした顔をごらん下さい。これをみても、平和を愛した古代の入たちの氣持がよくわかるではありませんか。はにわには、このほか、うまや、いぬや、鳥などをこしらえたものがあります。

夢殿の観音

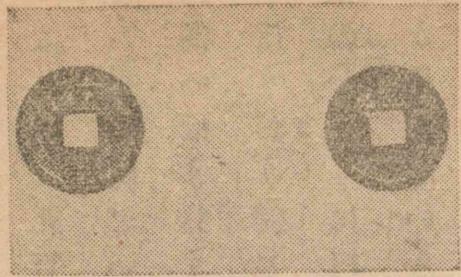
この美しい、りっぱなほとけさまは、いまから千三百年ばかりまえに作られたものであります。



夢殿の観音とって、いまでも、多くの人々からたつとばれてゐる作品です。

はじめてのお金

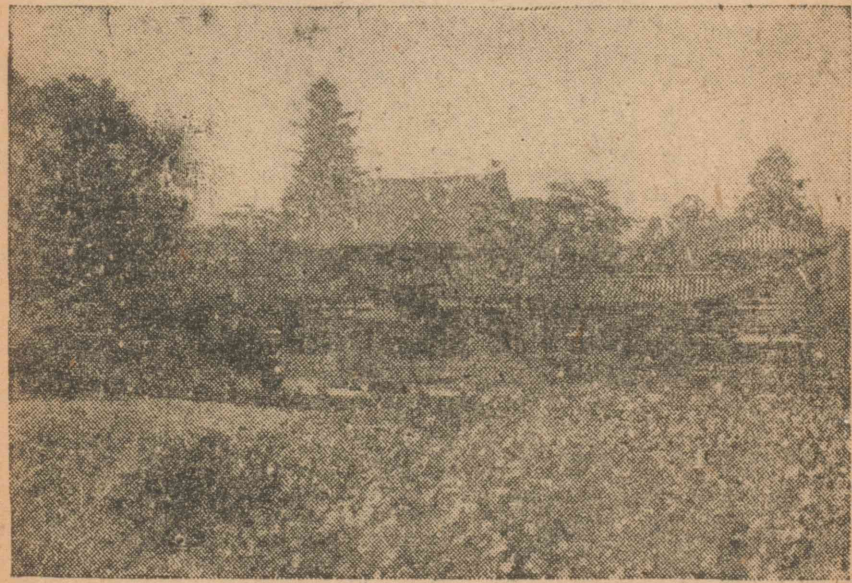
これは、千二百年ほどまえに、はじめて作られた日本のお金です。いまつかっているお金とずいぶんちがいます。四角なあながあいていたり、クロスワズパズルのようにならんだ文字があったりして、おもしろいお金です。お金がなかったときにくらべて、お金ができてからはどれほど便利になったか、考えることができますか。



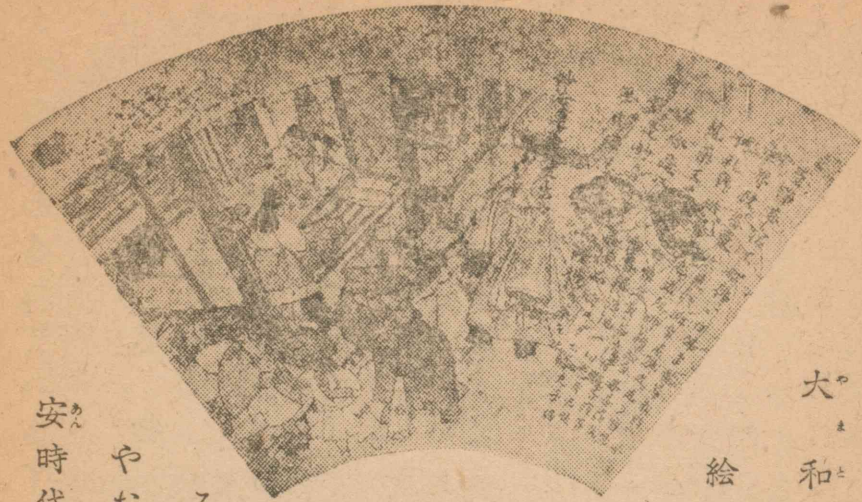
ほうおう堂

これは、九百年ほどまえに作られた平等院ひらういんという建物の中にある名高いほうおう堂です。

ほうおう堂という名まえは、屋根のかざりにほうおうがついてい
るからだといわれていますが、屋根の形や左右にのびたるうかのかつ
こうにも、ほうおうという鳥の美
しいすがたがあらわれていること
に気がつくことでしょう



大和絵



絵の中ほどをざらんさい。大きなげた
をはいた女の人が、おともをふたりつ
れています。この人たちの着物やか
ぶりものなども、いまのものどずい
ぶんちがっています。

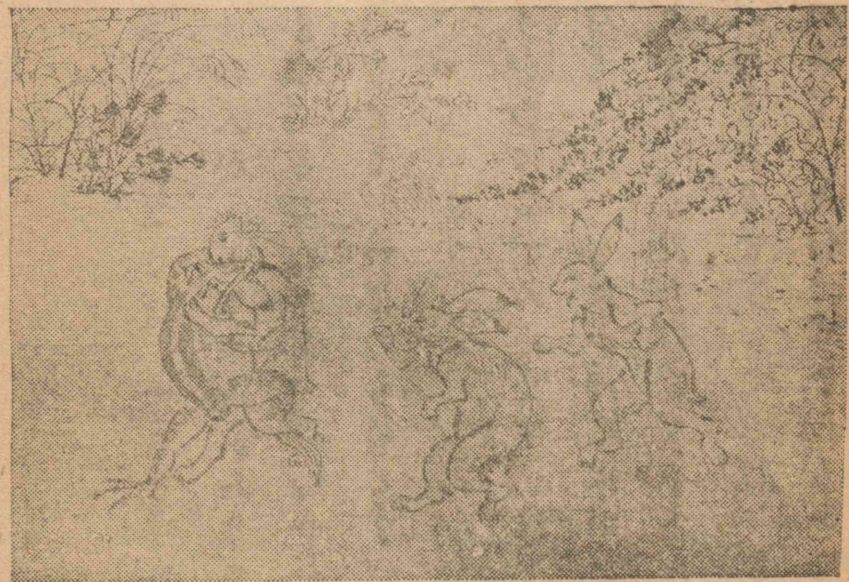
向こうがわに店がみえます。皮ざ
いくの店らしく、なにかの毛皮がひ
ろげてあります。くだものをならべた
やお屋らしいものもあります。これは、平
安時代の町の風景で、大和絵でやわらかに

かきあらわされています。

絵巻物

四つに組んだ大ずもう。かえるは、うさぎの耳をくわえて、得意の足かけをしました。うさぎはけんめいにこらえましたが、たおれそうです。たまりかねた二ひきのうさぎが、うしろから手をふり足をふって、おうえんをはじめました。

土ひょうは、はぎやすすきが



さきみだれた秋の野原。これは、鳥羽僧正とつばしんじょうという人がかいた動物絵巻の一場面であります。平安時代の終りから鎌倉時代にかけての藝術の中で、とくにすぐれたものの一つです。

さあ、うさぎが勝つてしょうか、かえるが勝つてしょうか。

仁王さま

こんどは仁王さま。大きな目、のびた手さき、しっかりふまえた両足、どこをみても、力があふれています。





能面

とも鎌倉時代の作で、ほりものとして代表的なものです。

仁王さまは寺の門に立って、ほとけさまをおまもりします。右の仁王さまをほつたのは運慶だといわれています。ふたつ

これは能につかうお面です。舞う人のあるきかたや、身ぶりや、手ぶりによって、このお面は、生きもののように、いろいろな表情をあらわします。室



町時代の藝術品です。

イソツブ物語

三年生のときに習ったイソツブ物語。イソツブ物語はイソツブという人が書いたのは、

たお話ですが、これをキリスト教の宣教師が日本に傳えたのは、

三百五十年ほどまえのことです。いんさつ機も外國から渡ってきて、いましたから、こんなりっぱな本ができました。日本のことばになおしてローマ字で書いてあります。

ESOPONO
FABVLAS.
Latinuo vaxite Nippon no
cuchito nasu mono nari.

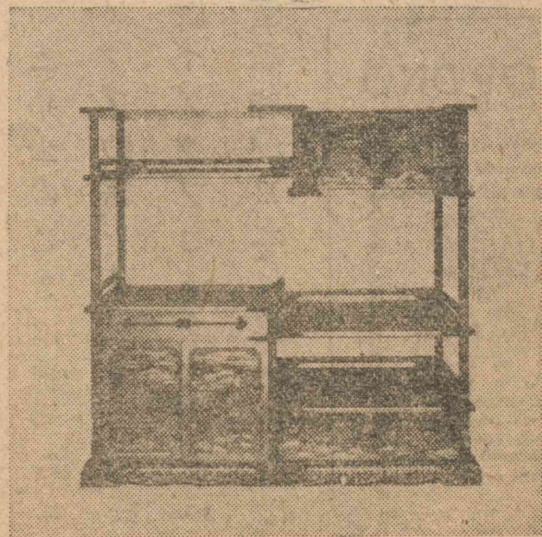
IEVS NO COMPANHIANO
Collegio Amacufeni voire Superiores no gomen
quotoxite coreuo fanni quamu mono nari.
Gcxixxe yori M.D. L. XXXXIII.

外國から書物が新しくはいつてくることは、外國人の心が傳
わることで、日本はこのような心をとりいれて、どんどん育っ
てきました。

まき絵書だな

これは、茶たんすにしています。江戸時代に
ききたまき絵書だなです。

まき絵というのは、うるしをぬつ
たうえに、金や銀のこなをまいて、もようをあらわしたもので
す。また、なまりや貝などはめこんだものもあります。黒う
るしの中に、銀や貝が光をはなっているのは、なんともいえな



い美しきです。

まき絵は、日本のすぐれた工藝
品の一つで、古くから外國人にも
てはやされてきました。

浮世絵

おなじみの富士山の絵です。こ
の絵は北斎という江戸時代の人の
かいたもので、浮世絵といえます。
この浮世絵は、版画で、絵をか
く人と、それを木にほりつける人
と、紙にすりあげる人との共同作



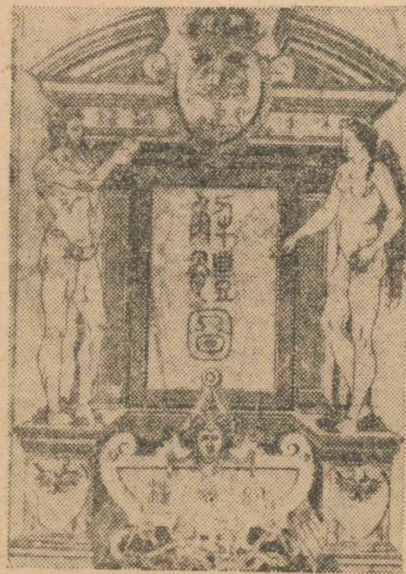
品なのです。三人がひとつに心をあわせた美しさは、このとおりりっぱなものとなって生まれたのです。

解体図

これは、オランダのターヘルアナトミアという人体のことを、絵いりで説明した本を、いまから百八十年まえに、日本で出版したものです。

表紙の文字は、「かいたいず」

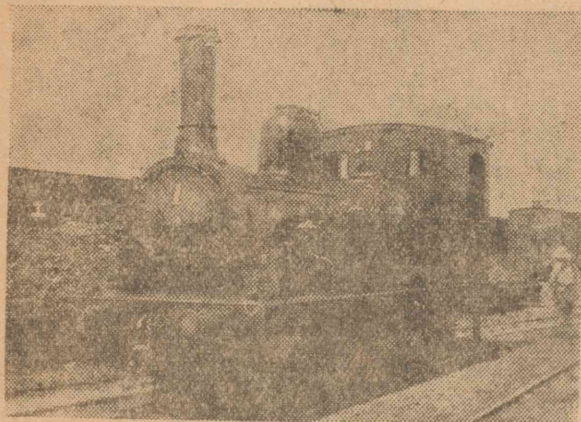
と読みます。そのころまで、人間のからだはどうなっているか、ほとんど知られていなかったのですが、この本によって、日本



の医学は、はじめてしっかりとしましたものとなりました。この本を日本語になおすのには、どれほど苦心したかわかりません。新しい学問をきり開いていくときは、いつの時代でもなみなみのどりよくでなしとげられるものではありません。

汽車第一号

なにかかわいいたい汽車ではありませんか。これは、汽車第一号で、明治五年九月十二日、はじめて日本で東京横濱間を走ったものであります。汽車にかぎらず、船でも、自動車でも、日に日に進歩しています。そうして、遠いと



ころも近くなり、世界はだんだん小さくなるような気がします。

議事堂

みなさんがたの代表が、全国からここに集まって、いろいろなことを相談します。平和な國日本を作るために、また、文化國家をきずくために、このこんどの新しい憲法は、この議事堂でたんじょうしました。



おしまいのことば

これで、日本の面影を写した写真帳が終わりました。このような歩みをたどってきた日本を、これからどうもりたてていけばいいでしょうか。

それは、民主主義ということばをほんとうに生かしていくよりほかに道はありません。ことばを生かすということばは、身に行うということばです。

こうして、みんなの歩調がそろったときに、はじめて、日本が正しい、美しい國となることができましょう。

國語 / 第五学年 下
 Approved by Ministry of Education
 (Date Jan. 7, 1948)

昭和二十三年一月七日 翻刻印刷
 昭和二十三年一月二十五日 翻刻発行
 (昭和二十三年一月七日 文部省検査済)

著作権所有

著作兼発行者

文

部

省

翻刻発行
 兼印刷者

東京都北区堀船町一丁目八五七番地
 東京書籍株式会社

代表者 長 得 一

印刷所

東京都北区堀船町一丁目八五七番地
 東京書籍株式会社

発行所

東京都北区堀船町一丁目八五七番地
 東京書籍株式会社

版 (111)	句 (71)	祖 (55)	悲 (47)	冷 (36)	荒 (23)	祝 (4)
解 (112)	選 (77)	順 (55)	傳 (47)	與 (37)	菜 (23)	賀 (4)
議 (114)	旗 (77)	共 (56)	歷 (47)	經 (40)	覚 (25)	路 (10)
化 (114)	誠 (89)	池 (56)	史 (47)	驗 (40)	進 (25)	輕 (16)
憲 (114)	堂 (104)	承 (58)	便 (47)	績 (42)	詞 (34)	散 (19)
義 (115)	卷 (106)	里 (59)	消 (48)	童 (43)	区 (35)	容 (20)
	宣 (109)	評 (62)	簡 (48)	影 (46)	別 (35)	易 (20)
	師 (109)	細 (65)	裏 (53)	詩 (47)	因 (35)	歡 (23)

広島大学図書

0130449572

